

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12549

研究課題名（和文）70年代の大野美代子のインテリア・橋梁にみる領域横断的デザインの可能性

研究課題名（英文）Possibility of Cross-disciplinary Thinking in Interior Design and Bridge Design of Miyoko Ohno in 1970s

研究代表者

湯澤 幸子（Yuzawa, Sachiko）

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：30756135

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：大野美代子が領域横断によって追求したテーマは、モノの規模やスケールの拡張ではなく、人と物と空間の関係性をどのように構築するかであり、インテリアデザイナーから環境デザイナーへ職能を変化させ、領域横断するデザイン思考によって「美しい橋」を追求した。デザインする事への根源的な問いかけにより、人間が生きられる空間のあり方や都市環境形成に関わる公共事業のあり方への意識改革、人間不在の効率主義および消費偏重の商業主義への批判を行なった。本研究において、1970年代を中心に、アート、建築、インテリアデザイン周辺領域の思潮動向を分析し、同時代のデザイナーと比較し、デザイン思考と技術の特徴を明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義と社会的意義は、大野美代子のデザイン思考と技術によって社会実装された「都市のリビング」としての歩道橋、橋梁、道のデザインを通じて、人間の居場所と都市環境形成に関わる公共事業の関係性を考察した上で、領域横断によって獲得されたデザインの社会的価値を明らかにし、次世代のデザイン評価の軸を示した点にある。

本研究の成果は、今後、デザイン顕彰制度を通じて、継続的に、人材育成に寄与すると共に、課題解決に向けた実効性のある持続的な空間提案、共創的なまちづくりに向けたデザイン手法の一助となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：Miyoko Ohno, a Japanese interior designer, began bridge design in the 1970s. The themes that she pursued in her cross-disciplinary work were not simply the expansion of the size or scale of objects, but also ways to construct relationships among people, objects, and spaces. She made a self-initiated transition from interior designer to environmental designer, pursuing “beautiful bridges” through cross-disciplinary design thinking. By asking fundamental questions about design, she transformed our awareness of the nature of spaces in which people can live, as well as the nature of public works involved in forming urban environments. She was also critical of any philosophy of efficiency devoid of consideration for people. In this study, we analyze trends of thought in the domains surrounding and connecting art, architecture, and interior design, mainly in the 1970s. By comparing Ohno with others in the same period, we clarify the characteristics of Ohno's design thinking and techniques.

研究分野：インテリアデザイン

キーワード：都市のリビング 環境デザイン 空間デザイン 領域横断

## 1. 研究開始当初の背景

社会的要素の多様化、共創的デザインによる課題解決の必要性の高まりから、異分野における領域横断や融合を目指した実践上の取り組みが行われている。住環境をはじめ商業空間から公共空間まで広がり、横断と融合への社会的要請は高いが、多くの課題が指摘されている。

各デザイン対象別の専門分野は、各々の歴史の中で独自の思想・技術を育み、各々の社会実装を取り巻く状況とその変化に対応し、各々の業界システムを形成してきた。領域横断的活動の基盤となる異分野間の専門家の健全な連携に向けて、社会実装を取り巻く状況との関係の中で、各デザイン分野の思想・技術の特徴を理解し、共有する必要性が指摘されている。

領域横断的デザインの社会実装と新たな価値の創出の実現に寄与するデザイン思想・技術の特徴の理解は重要な課題である。その解明には分野横断的な共同研究を必要とするが、未だ十分な知見の蓄積は無く、インテリア、土木デザインにおいて社会実装を実現した大野のデザインに関する分析を各デザイン史に位置付け、多元的に考察し、領域横断的デザインに向けた知見の抽出を試みる必要がある。

大野がデザイン活動を開始した1960年代後半は、環境問題が顕在化し、工業化社会の歪みに対する批判的認識と人間が生きる時間と空間のあり様をどうするべきかが問われはじめ、デザイン論争という展開となって、ものづくりに関わるデザイナーの思考や行動に影響しはじめた時期にあたる。また高度経済成長の影響を受けて、新しいデザイン表現領域が出現し、新しいデザイン産業および業界が形成されると同時に、各業界の中で様々な課題が顕在化しはじめた時期である。

この時期に大野は、従来の土木・公共事業において希薄であった、デザイン意識、社会的に弱い人への配慮といった視点を導入し、今日的なまちづくりの規範となる社会実装を行なっている。インテリアデザイン分野で醸成されたデザイン思想・技術を発展させながら、公共事業制度の中で、継続的にデザインの社会実装を実現した大野の方法を明らかにする事は、領域横断的デザインの可能性に関する議論に重要な知見となる。

安全性、速達性、経済合理性だけを優先するのではなく、「都市のリビング」という表現を用いながら「関係をデザインする」方向へ変化させていった大野のデザイン活動を通じて、大野がもたらした変化・影響について、明らかにする。時代思潮との関係を踏まえ、インテリアから土木への異分野の領域横断に至った思考・技術の特徴を分析し、共創的デザインの課題解決力を考察し評価する。

以上から、本研究課題の学術的「問い」は、「1970年代日本のインテリア・橋梁デザインにおける社会実装を基盤に展開した大野美代子のデザインの特徴が示す、領域横断的デザインを可能にするデザイン思想・技術の特徴は何か」である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、デザインの社会性に関する分析・評価のフレームワークを構築した上で、インテリアデザインにおける大野のデザイン思想・技術と社会実装の特徴、および橋梁デザインにおける大野のデザイン思想・技術と社会実装の特徴を分析・考察し、以上の成果から領域横断的デザインを可能にするデザイン思想・技術の特徴の一部を明らかにすることである。大野の仕事が、インテリアデザイン業界および、橋梁デザイン業界に与えた影響の解明に寄与するとともに、デザインの評価軸の変遷を明らかにする。また、事業者とデザイナーの関係や、どのように協働し、その思想を社会に実装していったのかを明らかにする。

領域横断的デザインの社会実装を継続的に実現したデザイナーのデザイン思想・技術の特徴と変化を各分野の社会実装を取り巻く状況と相互影響の精緻な分析と合わせて解明し、領域横断的デザインを可能にするデザイン思想・技術の特徴を思想、技術、社会実装を取り巻く状況の関係から、多元的に考察する。

本研究成果は、デザイン領域の融合や領域横断的デザインの社会実装に関わる課題解決に寄与する具体的知見を提供する。

## 3. 研究の方法

インテリア、橋梁、道路における社会実装を対象に、多元的な視点からデザイン思想を研究考察する。

### (1) 大野のインテリアデザイン思考の分析

日本のデザイン思潮の中で、黎明期にあったインテリア分野とその周辺の空間デザイン分野(アート・建築)の思想的関係性を整理する。雑誌「JAPAN INTERIOR DESIGN」を中心に、通時的分析を基礎とし文献調査、デザイナーなど関係者へのヒアリング調査を行い、その特徴と変化を整理する。調査対象は、多摩美術大学に寄贈されたアーカイヴ資料(スケッチブック、図面、設計資料、写真、フィルム、原稿、出版物)とする。

## (2) 橋梁デザイン分野の大野の言説の分析

大野の言説について「KH Coder」を使用し、計量テキスト分析を行う。調査対象は、大野の作品集その他の著作、講演記録などの163の文献とし、橋梁の対象地・周辺地に関する記述やデザインの考え方に関する記述を抽出し、デザインの志向の特徴を示すクラスターに整理する。

## (3) 領域横断を可能にする協働の在り方の分析

事業者である首都高速道路公団とデザイナーがどのように協働し、設計思想を具体的に社会実装していくのかについて、文献調査や大野と共同した関係者のインタビュー調査をもとに明らかにする。

## 4. 研究成果

インテリア業界、橋梁業界、道路公団との協働による社会実装のプロセスの分析から、大野のデザイン思考・技術の特徴及び、その限界を明らかにした。

### (1) 領域横断的デザインを可能にするデザイン思考

インテリアデザインの概念を発展させ、空間を閉じたものではなく、人を起点として、無限に拡張ができることを示した点に大野の最大の特徴がある。大野のデザイン思考は3つの軸が存在し、スケールの軸、持続性の軸、社会性の軸があり、図1に示すように、3次元的にそれぞれ3方向に、ベクトルを持つ。

スケールの軸は身体感覚と密接に関係している。家具から橋梁まで空間規模やスケールの大小を問わず、大野が一貫して追求したのは、身体性による形態の決定であり、現実的な居心地の良さである。ミリからキロまでの広範なスケールを自在に行き来する思考は、「都市のリビング」という言説によって表現され、大野のデザイン思考の核にあたる。ヒューマンスケールを中心とするインテリア感覚から生み出した都市のリビングという思想を巨大な公共事業に持ち込んだことによって、インテリアから土木への領域横断は、シームレスになされたと言える。大野にとって、デザインとは関係をつくることであり、物の大小によって仕事の領域を限定する必要はなく、インテリアデザイナーであり、同時に橋梁デザイナーであることは矛盾しない。

持続性の軸と社会性の軸については、当時の思潮である消費経済偏重主義や作家主義とは距離を置く思考であり、その後のインテリアデザイン、土木デザイン両方のデザインアワードにおける評価の基軸として、影響を与えることになった。

### (2) 領域横断的デザインを実現した技術の特徴

ディテールへの信頼

協働を重視

デザイン契約関係の形を問わない

大野は全体を自分一人で設計することに、こだわりは無く、作家性への執着は見られない。このデザインの匿名性の受容は、大野の特異な点である。むしろ土木技術者との分業を積極的に受け入れ、関係者との共同を楽しみ、ディテールや付帯物の収めかたを期待されていることを自覚し、発注者の思考を理解した上で、デザインの落とし所を決定する手法で、長年に渡り、多くのデザイン検討の依頼を受け、その期待に答え続けた。匿名性を受け入れ、デザイナーとしての主張をしなかったのは、生来の社会へ奉仕する意識が強く働いた為なのかもしれない。いずれにせよ、長年にわたり、デザインの対価報酬不払いを容認した結果として、土木業界のデザイン意識の低さを温存し、デザインを生業とする次世代が誕生し難い土壌を残した事は、パイオニアとしての限界を示していると言える。

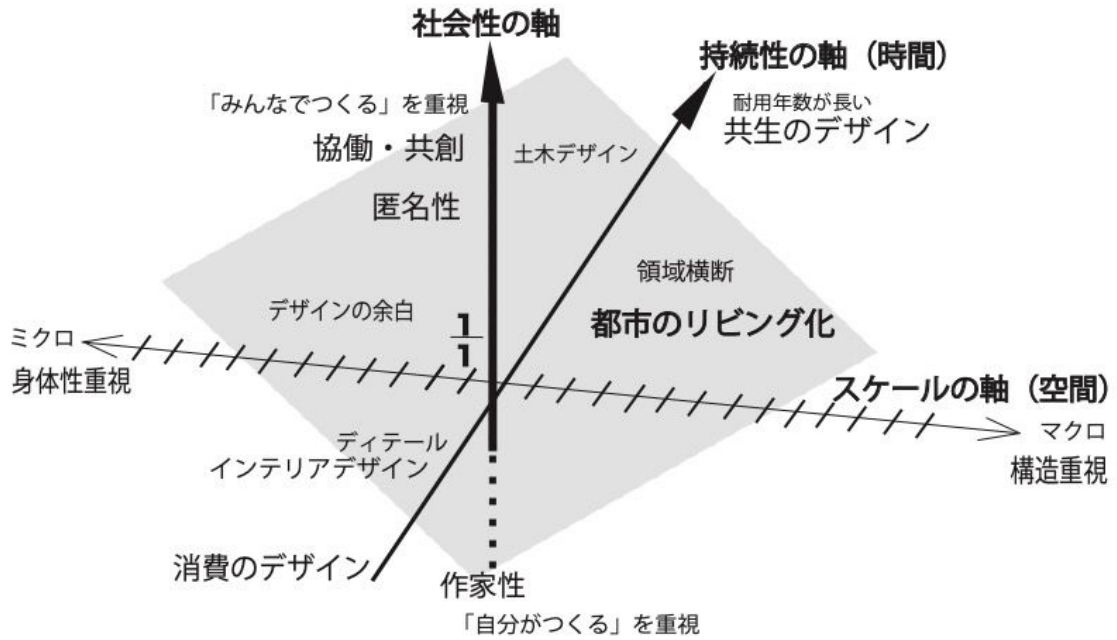
首都高速道路における橋梁設計のフェーズと橋梁規模の関係において、大野の関わりあいからは、時代によって変化を余儀なくさせられており、事業者側のエンジニアのデザインに対する態度変容により、技術者との協働の形が次第に変化した。公共事業でのデザインの対価に関しては、相応の報酬を得られない状況を変えることは出来なかった。多数の社会実装を現出した一方で、デザインがもたらす付加価値や、デザインをどう継承するかの議論には及ばず、公共事業のインフラ整備に関して、次世代のデザイナーの参画が難しいままとなっている。

図2は、デザイン思考の3軸と技術の特徴によって領域横断が実現し、「都市のリビング」が社会実装されたが、その特徴の一つの匿名性の受容が原因で、土木公共事業におけるデザインの必要性は認知させたが、デザインの対価に関しては、相応の報酬を得るには至らなかった結果を示す。

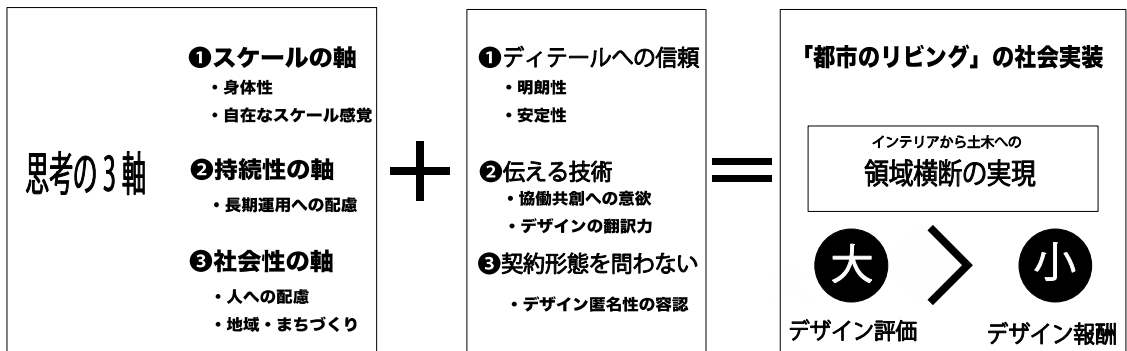
### (3) 今後の課題とデザイン評価

次世代のデザイナーのために、デザインの評価軸を示し、その啓蒙活動を行ない、デザイナーの社会的な役割を明らかにし、デザインを生業としていける社会の実現に寄与した。デザインの決定はデザイナーの恣意的な個人的な価値観ではなく、社会的・持続的価値観によるべきとした。図3は、空間デザインにおける評価軸を示す。これは今日のインテリアデザイン業界及び土木業界の発展に寄与し、人材育成の観点からも重要なデザイン顕彰制度の評価の基準として影響を与えている。従来、消費を牽引し経済偏重の商業空間デザイン業界に警鐘を鳴らし、社会公益性の視点の導入や、循環型社会へ向けた持続性の軸を創設したことは画期的である。

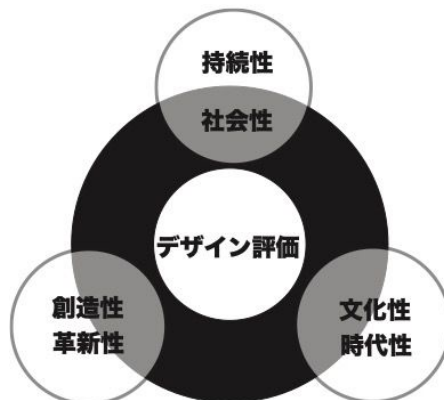
(図1) デザイン思考3軸



(図2) 大野美代子のデザイン思考3軸と技術的特徴がもたらした結果



(図3) 空間デザインの評価軸(案)



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 湯澤幸子	4. 巻 NO.4
2. 論文標題 大野美代子研究展とデザインのアーカイヴ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 軌跡	6. 最初と最後の頁 24 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 湯澤幸子	4. 巻 第37号
2. 論文標題 大野美代子アーカイヴスの教育活用に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 多摩美術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 85 95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 湯澤幸子	4. 巻 267
2. 論文標題 大野美代子のインテリアデザインにみる領域横断する思考	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 デザイン学研究	6. 最初と最後の頁 11 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大村瑛太 菊池裕太 福島秀哉	4. 巻 267
2. 論文標題 橋梁デザイナー大野美代子の言説にみるデザイン志向よ造形操作の特徴	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 デザイン学研究	6. 最初と最後の頁 39 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 荻原貴之、福井恒明	4. 巻 19
2. 論文標題 橋梁デザイナー大野美代子の設計思想と社会実装－首都高速道路における事業者との協働に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 景観・デザイン研究講演集	6. 最初と最後の頁 71 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

大野美代子研究展「ミリからキロまで」を多摩美術大学八王子キャンパスアートテークギャラリーにて、2021年6月21日から7月7日まで開催した。  
大野美代子アーカイブ「ミリからキロまで」資料展を多摩美術大学アートテークギャラリーにて開催し、2024年3月2日オープニング記念シンポジウム「領域を超えたデザイナー研究から見えるもの」を多摩美術大学八王子キャンパスレクチャーホールにて実施した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉村 純一  (Yoshimura Junichi)  (20524135)	多摩美術大学・美術学部・教授    (32640)	
研究分担者	福島 秀哉  (Fukushima Hideya)  (30588314)	東京大学・大学院新領域創成科学研究科・客員連携研究員    (12601)	
研究分担者	福井 恒明  (Fukui Tsuneaki)  (40323513)	法政大学・デザイン工学部・教授    (32675)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------